

可能性を無くした「かもしれない」

ワンプラディット アパサラ キク

1 はじめに

「かもしれない」(または口語で用いられる省略形の「かも」)は多くの研究では(1)のように「可能性」を表すモーダル表現として扱われている(三宅 1992、益岡・田窪 1992、宮崎等 2002 など)。

(1) 彼は来る**かもしれない**し、来ない**かもしれない**。そんなの分からないよ。

しかし、(2)のように、可能性を表す認識的モーダルとは考えにくい場合でも用いられる。

(2) (新発売の青汁を試飲して) あ！意外とおいしい**かも**。

(1)では話し手は真偽について直接知ることができない命題に言及しており、先行研究で扱われているような典型的な可能性を表す表現である。一方、(2)では話し手自身が試飲をして、おいしいかおいしくないかという判断を直接的な経験によって下すことができるときに用いられている。この場合でも「かもしれない」は可能性を表しているのか、また、なぜ認識的モーダル表現が直接経験的な判断を表す表現としても用いられ得るのかが疑問である。

本論文では前者を「かもしれない」の認識的用法 (Epistemic use: 以下、「かも 1」)と呼び、(2)は(1)とは区別して、直接証拠的用法 (Direct evidential use: 以下、「かも 2」)であることを示し、先行研究では触れられていない「かも 2」の使用・解釈条件を探る。

2 「かも 1」と「かも 2」の相違

2.1 Epistemic use VS Direct evidential use

Palmer (2001)では、命題モダリティ (Propositional Modality) は認識モダリティ (Epistemic Modality) と証拠性モダリティ (Evidential Modality) とに大きく 2 種類に分けられている。認識モダリティには Speculative、Deductive、Assumptive という 3 種類の推論方法が挙げられ、一方、証拠性モダリティは、話し手が直接経験や、伝聞などによる判断の証拠が存在していることを表示するものである (Palmer 2001: 24)。

本論文では特に「話し手が命題の真偽について直接的な経験によって決定することができるかどうか」という点に着目する。認識モダリティは基本的に話し手は真偽について直接知ることはなく、推論などによって帰結された判断をしている。それに対し、証拠性モダリティは特に本論文では直接経験から得られた証拠 (Direct evidence) によって命題の真偽を決定したことを表す。

認識的用法においては、「かもしれない」によって表される意味は、ある場合に (一つの可能性として) 命題が真であるという認識である。よって、「可能性判断」のみが、一つの可能性として、真であればよいのであるから、(1) や以下の (3) のように、同時に矛盾する命題を並べることもでき、(4) のように、矛盾していない複数の命題を並べることもできる (三宅 1992: 40)。

(3) 泊まる**かもしれない**し泊まらない**かもしれない**。どっちにしても相当遅くなる。
(三宅 1992: 39 太字は著者による)

(4) 一人の旅行は危ないと感じる**かもしれない**。割高と感じる**かもしれない**し、寂しく感じる**かもしれない**。
(三宅 1992: 40 太字は著者による)

それに対し、断定や証拠性モダリティは、総ての可能性として、真であるということが表される (5)。そのため、発話は否定不可能である。「かも 2」が用いられている以下の (6) でも p を否定・キャンセルすることができないため、この「p かも 2」は可能性を表す認識的モダリティとは異なり、話し手の直接証拠による判定を表すものであると言える。

(5)*これおいしいけど、おいしくない。

(6) (新発売の青汁を試飲して) あ！意外とおいしい**かも**。*おいしくない**かも**。

上記の否定の可否からわかるように、認識的用法では判定の証拠がないため、「p」の命題は話し手の信念*¹とは切り離されている*²。すなわち、「p かも 1」を発話した後に話し手は「でも、私はそう思わないけど」のような、可能性の表示が自分の信念とは別物であると明示的に発話することができる。一方、直接証拠的用法では、自らの体験で「意外とおいしいかも。でもそう思わないけど」というふうには言えない。よって、この用法での

*¹ 本論文では「信念」を次のように定義する。「信念」とは「話し手にとっては p が確認済の真であると信じており、矛盾していない命題の集合である。」とする。

*² 「p」の命題は話し手の信念とは別物であるという議論は、すでに三宅 (1995) でなされている。すなわち、話し手の信念ではその命題は真 (偽) であるが、実際は偽 (真) である可能性もある、といった認識も可能である (三宅 1995: 6)。

「p」の中に話し手の信念が含まれていると言える*³。なお、「否定・キャンセルできない」というのは1回の判定における制限である。発話後に新たな証拠などがあれば1回目の判定を否定するような再判定を行うことは可能である。

2.2 文中の位置の相違

前節で議論した「話し手の信念が含まれているか否か」は統語的位置とも関連づけられる。

仁田(1989)や野田(1989)では、モダリティは真正モダリティと疑似モダリティの2極に分けられている*⁴。真正モダリティとは、「発話時における話し手の心的態度の表現」であり、真正モダリティは過去や否定になることもなく、話し手以外の心的態度に言及することもないとされている(仁田 1989: 34)。この条件を満たさないものは全て疑似モダリティである。つまり、疑似モダリティは過去や質問、否定の形式が加わり、従属節・引用節の中で使われるものである(野田 1989: 133)。

仁田(1989)において、「かもしれない」は本来、疑似モダリティ形式であるが、非過去、一人称、文末という条件の下では真正モダリティ(相当)であるとされている。

本論文では、真正モダリティか疑似モダリティかという点については議論しないが、仁田(1989)で提示されている「文末使用」、および野田(1989)の「従属節・引用節内での使用」という条件を借用し、認識的用法の「かも1」と、直接証拠的用法の「かも2」の統語的な相違を明らかにする。

(7) 確におっしゃる通りかもしれません が、私はもっと良い対策があると思います。

(8) (文脈：新発売の青汁を試飲して)

*あ！意外とおいしいかもしれない けど、君どう思う？*⁵

(7)では「かも」は従属節で用いられているのに対し、(8)では不可能である。これは文脈から分かるように、(7)では「かも」が用いられる前件の命題は話し手の信念とは別物であり、その命題は客観的な世界の様相(この場合は対話相手の発言を受けたこと)を表すにすぎない。一方、(8)のように、話し手自身の判定は従属節に盛り込むことはできない。

同様に、名詞修飾節でも相違点が見られる。

*³ 森山(1989)でも、「かもしれない」が話し手の判断によるものか否かに関して、談話的キャンセルによるテストが行われている(pp.68-69)。しかし、テストの結果は本論文と違う傾向を見せている。

*⁴ 「真正モダリティ」と「疑似モダリティ」という用語は仁田(1989)に従う。野田(1989)では、「真性モダリティ」と「虚性モダリティ」という用語で対応している。

⁵ 例文の文頭のアステリスク「」はその発話が指定の文脈では適切に用いられ得ないことを意味する。

(9) ゴミ捨て場にはまだ使えるかもしれない もの がいっぱい捨ててあった。

(10) (自ら試飲しておいしいと知った青汁について)

*このおいしいかもしれない 青汁 をもっともらえますか。

(9) のように「かも 1」が名詞修飾節に用いられる場合においては、話し手にとって命題の真偽が未決定である。それに対し、直接経験によって真偽の判定ができた場合には、(10) のように「かも 2」は名詞修飾節で用いることができなくなる。

このように、話し手の信念が含まれる直接証拠的用法の「かも 2」は客体化されることなく、従属節や名詞修飾節で用いられることはない、話し手の発話時における心的態度の表現である。そのため、発話時における心的態度を表す他のモーダル表現と共起できないことが予測される。よって、以下の (11) のような、「かも」が文末表現「じゃない(か)」と共起している場合には、「かも 1」としか解釈できない。

(11) (遠足に) 傘を持って行きなさい。雨が降るかもしれない じゃない。

「かも 1」と「じゃない(か)」との共起については原稿を改めることにし、本節では、「かも 2」は文末にしか現れないという記述にとどめる。

2.3 知識領域への位置づけ

本節では、「かも」の認識的用法と直接証拠的用法を、談話管理理論^{*6}で提示されている、話し手の知識状態の領域に当てはめる。

「p かも」の解釈は時制によっても異なる。例えば、以下の未来の命題の例を見てみよう。

(12) 来週がレポートの締め切りだから、明日あたりに彼が来るかもしれない。

(12) のような命題の真偽は、話し手は直接的な証拠がないため、判断できず、複数の可能性が共存している中から推論によって「明日来る可能性」を取り上げるに過ぎない。このような未来の命題に付加される「かも」は以下のように書き換えることができる。

^{*6} 談話管理理論 (田窪・金水 1996、田窪 2006 など) では、話し手の知識状態の観点から命題の種類は次のように分けられている。

D-命題 (D-領域内) とは話し手 (認知主体) が直接知っている命題である。つまり、推論などの操作なしで直接アクセスできる命題である。D-命題は R 世界 (話し手の現実世界) に含まれる。真偽が既に決まっている命題は R 世界に入っており、話し手がまだ認知していないものは R-D 領域にあるとされている。

一方、推論などによって得られた知識のうち真偽が決定していない命題は I-命題と呼ばれる。

(田窪 2006: pp.10-12)

- (13) 未来の場合 : [It has not been proven that] \neg p
 (\neg p という可能性は消えたわけではない)

多種の時制と組み合わさった「p かもしれない」を、談話管理理論で提案された領域に当てはめると以下の図の通りになる。

R-D 領域 来たかも	I-領域 来るかも
D-領域 いいかも	

図1 「p かもしれない」と各領域

図1では、例えば、部屋の外で足音がしているが姿は確認できていないという状況で、「(待っている人が)来たかも」のような過去、あるいは、「宅急便かも」のようなDでない現在で用いられる「p かも」はR-D領域に当てはまる。また、まだ決定できない未来の出来事(「彼が来るかも」)はI-領域に属する。この2つの領域で用いられる「p かも」は認識的な読みをとり、pも \neg pも両方考慮に入れられている。反対に、話し手自身が直接に経験し、判断した「いいかも」や「おいしいかも」は推論のようなニュアンスはなく、D-領域に当てはまる。

R-D領域とI-領域内の「p かも」は認識的用法の「かも1」とし、D-領域の「p かも」のみが証拠的用法の「かも2」である。

認識的用法と直接証拠的用法とでは理論上、話し手の異なった認知領域に言及するにも関わらず、「p かも」という同一の形式で表せるのはなぜだろうか。「可能性」のニュアンスが消える「かも2」がどのような条件の下で解釈が可能になるかについては次節で考察する。

3 「かも2」の条件

本節では、「かも2」の解釈が可能になる条件を考察する。

3.1 直接的経験

前節で明らかになったように、「かも2」は文末のみに現れ、話し手が直接的な経験によって命題の真偽が判断できる場合に用いられる。これを大前提として考察していく。

- (14) A: (茶髪に染めたBと会って) あれ、雰囲気違うね。

B: *昨日髪染めたかも。

(14)では、髪を染めたのは話し手自身の経験であるにも関わらず、「かも2」を用いることはできない。これで、ただ話し手の直接経験という条件だけでは十分ではないことが分かった。(2)の「意外とおいしいかも」のような命題と比較すれば、命題に対する話し手の評価というのにも必要条件ではないかと考えられる。

3.2 話し手の評価的判定

本節では「かも2」の解釈が可能になるもう一つの条件である評価的判定の性質を明らかにし、定義する。

(15) (文脈：Aは花柄シャツに縞々スカートを試着した)

A: この組み合わせどう？

B: うわっ、変**かも**。

(15)では、話し手は「この服の組み合わせは変な可能性がある」という解釈ではなく、自分の感覚で評価的な判定を下したと解釈するほうが自然である。この評価的判定はどのような性質をもつかを考察する際、やはり(15)のような体験現場でのリアルタイムの判断が考えられる。

3.2.1 現状の世界

評価的判定はまず、リアルタイムの判断、つまり現状の世界に言及する場合に限り効果的である、という仮説を立てる。現状の世界というのは、条件世界とは反対であり、話し手が発話現場で直接体験できる世界である。したがって、「pかも2」のテンスは基本的には現在形である。以下の(16)と(17)を比較してみよう。

(16) (新発売の青汁を試飲して) あ！意外とおいしい**かも**。 (= (2))

(17) スープに塩を入れたらおいしい**かも**。

(16)は話し手が直接体験できる世界であり、この場合、「おいしいかも」は評価的判定の解釈を受けることができる。一方、(17)でも話し手が評価しているのではないかと伺えるが、この発話は条件文になっており、話し手が真偽の判断や直接体験できない条件世界(つまり、 $\neg p$ の可能性が消えたわけではない世界)に言及している。そのため、この発話での「pかも」は「かも2」として解釈することはできない。

なお、この理論は文面上の統語的な制約を問題にしていない。すなわち、条件文の形をしている発話でも、条件世界に言及していない場合には「かも2」の解釈が可能になる。

(18) (文脈：話し手は大荷物を抱えて、ドアの前に立っている聞き手に向かって)
ドア開けてくれるとうれしい**かも**。

(19) ((18)と同じ文脈)
ドア開けてほしい**かも**。

(18)の発話は条件文になっているが、「かも2」の解釈が受けられる(19)と同じ文脈において同じ発話の意味、意図および機能を果たしている。しかし、以下の(20)とは異なって、(21)のように談話をキャンセルすると不自然になる。

(20) スープに塩入れたらおいしい**かも**。保証はないけど。

(21) ドア開けてくれるとうれしい**かも**。*保証はないけど。

(18)の発話では、「ドアを開けてくれるとどうなるか」という条件世界に言及するのではなく、「聞き手にドアを開けてほしい」という現状の世界において、聞き手への依頼など発話の力 (illocutionary force) が用いられる婉曲表現となっている。

また、(22)のように「かも2」に先行する p が過去形の場合も見られる。

(22) A: 昨日、B ちゃん変な青汁飲んでたでしょ。どうだった？

B: あれね、おいしかった**かも**。

(22)では、過去形が用いられているが、評価的判定が過去に行われていると考えるより、この場合では話し手は過去の出来事や感覚を思い起こし、現時点で判断したことを表示していると考えの方が自然である。判定が現在に行われるため、(16)のプロセスと変わらず、(22)の「かも」も「かも2」であると言える。

しかし、(23)のような「pかも」全体が過去形の場合は「かも2」の解釈を受けることはない。

(23) (文脈：昨日自身が試飲した青汁の感想) *意外とおいしい**かもしれなかった**。

(24) (文脈：自身が飲んでいない青汁について)
おいしい**かもしれなかった**のに、飲まなくて勿体無かったわ。

(24)は「pかも」全体が過去形である。この場合は文脈から分かるように判定は行われておらず、2.2節で見たように、「かも」が従属節で用いられており、客観的な世界の様相を表している。よってここでは「かも1」の解釈しか得られない。

3.2.2 評価に関わるスケール述語

次に前節に関連して、話し手の評価的判定のもう一つの性質を考察する。これまでの例で見たように、「かも2」は「おいしいかも」や「変かも」のような形容詞句で形成された命題で用いられることが多い。それは形容詞句が条件というわけではなく、形容詞句の性質と考えられる「スケール」が重点である。

- (25) (文脈：出かける予定でドアを開け、雨が降っていることを知って躊躇う)
- a. *雨が降っている**かも**。
 - b. 雨が強い**かも**。

(25a) と (25b) の違いはスケールの存在にある。話し手がドアを開けて雨が降っているのを自らの体験で認識した文脈では、スケールの存在が考えられない (25a) での「かも2」の使用は許容されない*⁷。それに対し、雨の強さに言及する (25b) では用いることができる。「雨の強さ」にはスケールが存在しているからだと考えられる。

スケール述語 (Scalar Predicates) については、Brown and Levinson (1978) では次のように述べられている。*The use of scalar predicates such as 'tall' assumes that speaker and hearer share the criteria for placing people (or things) on this scale* (p.123). G.Lakoff (1972) でもスケールに関連する事象について説明がなされている。すなわち、「背が高い男性」の集合に属する男性の背の高さは他の男性の身長と比較して相対的に決められるものである (Lakoff 1972: 183)。背の高さは文脈、また対話の参加者の文化によって相対的に決まる一方、good-bad, beautiful-ugly, interesting-boring のようなスケールは文脈での使用で決まるのみならず、その基準自体が相対的である (Brown and Levinson 1978: 123)。

さて、「かも2」が後続するそれぞれのスケール述語を観察してみよう。

- (26) (文脈：外に出た) 寒い**かも**。

(26) や上記の「おいしいかも」は話し手自身の感覚そのものを表している。このような個人的な感覚を表す述語は話し手の心理的述語 (Psychological Predicates)、つまり、話し手自身でしか感じられない一人称制限の述語が典型的であり、この類の真偽は話し手が内面的にチェックした上で決まる。心理的述語以外でも以下のように「かも2」が用いられ得る場合が見られる。

*⁷ 「降っている」という動詞述語が原因で「かも2」が用いられないというわけではない。「強く降っている**かも**」のような述語に程度を表す副詞が付加されている場合は許容される。その場合は、程度を表す副詞にスケールが存在しているからであって、本論文の主張のさらなる根拠ともなる。

4 「かも 2」の含意と談話機能 ヘッジ

これまでの議論をまとめると、「かも 2」は、

- 話し手の信念が含まれる
- 否定できない
- スケールをもった評価的判定のときに用いられる

ということから、「かも 2」は「かも 1」と異なり、 $\neg p$ の可能性は残されていない。つまり「 p かも 2」は「 p が真である」ということを含意する。さらにスケール上の曖昧な部分を指すことでこのような含意は談話においてヘッジ (Hedge) の役割を果たす。ヘッジとは、Brown and Levinson (1978) では次のように定義されている。A 'Hedge' is a particle, word, or phrase that modifies the degree of membership of a predicate or noun phrase in a set; it says of that membership that it is partial, or true only in certain respects, or that it is more true and complete than perhaps might be expected (p.145).

「かも 2」を用いることによって、話し手が p と思っている、あるいは p と評価したと断定するのを控えることができる。これは Brown and Levinson (1978) のいう 'face'-preserving politeness strategies の一つであり、強い主張を避けることで対話がより和むという効果をもつ*9。

以下の (31) でも、「かも 2」によるポライトネス・ストラテジーが見られる。

(31) (文脈：A は花柄シャツに縞々スカートを試着した)

A: この組み合わせどう？

B: 変かも。

(31) では話し手の視覚・感覚という直接経験によって、相手の服の組み合わせが変であることは発話現場において判定されたものである。しかし、その評価を求めてくる相手に対して、「変だ」とはっきり返答するのが避けられている。

ヘッジとして用いられ得ることが、「かも」を類似する他の表現と比較する際に、一つの相違点となるのではないか、という仮説を、次節で検証する。

*9 なお、ヘッジは「かも 2」に特有の用法ではない。「かも 1」もヘッジとして用いられることがあるが、本論文の議論から除外する。

5 「おいしいかも」と「おいしいじゃん」

本節では「かも 2」を類似する表現と比較する。

ワンプラディット (2006) では、文末表現「じゃない(か)」*¹⁰の一つの用法として次のように述べられている。「「じゃない(か)」タイプ は話し手が発話現場において、知らない状態から直接経験によって命題の真偽を複数の選択肢の中から決定したときに用いられる」(p.171)。

「p かも 2」と「p じゃない(か)」は、発話現場で直接経験によって判断する点で共通しているが、以下の 2 例のように、各表現は話し手の異なった認知状態に言及しており、また使用条件・使用範囲そして談話機能も異なる。

(32) (文脈：新発売の青汁を試飲して)

あ！おいしい**かも**。／ あ！おいしい**じゃん**。

(33) (文脈：外に出て雨が降っていることを知る)

*あ！雨**かも**。／ あ！雨**じゃん**。

(32) では「かも 2」と「じゃない(か)」の両方を用いることができるのに対し、(33) では「じゃない(か)」のみが可能である。その違いは 3.2.2 節で議論したような「スケールへの言及」にあると考えられる。「かも 2」はスケールが必要条件であるため、(33) のようなスケールのない述語には用いることができない。一方、「じゃない(か)」はスケールを問題にしておらず、「おいしいかおいしくないか」または「雨か雨でないか」という複数の選択肢があった状態から証拠によって残りの選択肢を消去した結果を問題としている(ワンプラディット 2006: 172–173)。よって、「じゃない(か)」の方が使用範囲が広いと考えられる。

また、以下のように 2 つの表現の間では談話機能の差が見られる。

(34) A: (試着して) これどう？

B: え～！組み合わせ変**かも**。／ 組み合わせ変**じゃん**。

(34) のように「かも 2」はヘッジの効果をもたらしており、すなわち聞き手の服の組み合わせが変であるという断言を避けているのに対し、「じゃない(か)」を用いた場合は同様のポライトネス・ストラテジーは見られない。

*¹⁰ ワンプラディット (2006) では、「じゃないか」、「じゃない」、「じゃん」、「じゃないですか」、「ではないか」、「ではありませんか」という様々な形式を「じゃない(か)」にまとめて扱っている。

6 まとめ

本論文では、「かもしれない」は認識的用法としても直接証拠的用法としても用いられ得ることを示した。考察した事項は以下のようにまとめられる。

1. 認識的用法の「かも 1」は先行研究で扱われている通り、「可能性」を表す表現であり、 p の可能性と $\neg p$ の可能性という両極の可能性が共存している。話し手の知識領域に当てはめると、R-D 領域または I-領域に当たる。
2. 直接証拠的用法の「かも 2」は D-領域に当てはめることができ、 $\neg p$ の可能性が消えている。「かも 2」は < 直接経験に基づいた話し手の評価的判定 > という条件の下で使用される。
3. 評価的判定は次のような性質を有する。
 - (a) 現状の世界への言及：「かも 2」はテンスの分化はない
 - (b) スケール述語：
 - psychological predicates
 - standard for an individual and/ or for a specific purpose
4. 「かも 2」はスケール上の曖昧な部分を指すことで、談話ではヘッジとして用いられ得る。

しかし、本論文でまだ十分に説明されていない形式に関する問題や周辺事項が残る。以下の 2 点を明らかにすることによって本論文の主張をさらに裏付けることができるだろう。

- i. 「かも 2」は文末にしか現れず、終助詞のような振る舞いをしていることを示した。しかし、短縮形でない「かもしれない」の「しれない」の部分については考察する必要はないであろうか。「しれない」の語彙的な意味と直接証拠的用法での認知状態が背反していることが、「かも 2」が完全に文法化していることの根拠になると考えられる。これについては具体的な考察が必要となる。また、「かもわからない」や「かも覚えていない」などの、生産的に作られた表現は「かも 2」として解釈することはできない。これについてもまだ議論する余地がある。
- ii. 最後に、「かも」に終助詞「ね」が後続する場合の容認度については、本論文のこれまでの議論に基づいて、「かも 1」の解釈のみが可能であるという予測は立てられるが、データや具体的な議論は扱えなかった。今後の課題とする。

参考文献

- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』 3: 59–74
- 田窪行則 (2006) 「日本語条件文とモダリティ」京都大学博士論文
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』 pp.1–56 くろしお出版
- 野田尚史 (1989) 「真性モダリティをもたない文」『日本語のモダリティ』 pp. 131–157 くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 くろしお出版
- 三宅知宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢』 26 号: 35–47
- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『国語学』 183 集: 1–11
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書 4 モダリティ』 くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識ムードとその周辺」『日本語のモダリティ』 pp.57–120 くろしお出版
- ワンプラディット・アパサラ・キク (2006) 「談話管理理論からみた「じゃない(か)」の基本的性質」『京都大学言語学研究』 25: 157–186
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Lakoff, G. (1972). Hedges: a study in meaning criteria and the logic of fuzzy concepts. In *Papers from the eighth regional meeting of the Chicago Linguistics Society*, pp.183–228. Chicago.
- Palmer, F. R. (2001). *Mood and Modality* Second edition. Cambridge.

On the Direct Evidential Use of *Kamo(shirenai)*

Apasara Kiku WUNGPRADIT

Abstract

This paper shows that the expression *kamo(shirenai)* in Japanese can be used both as (a) an epistemic modal indicating a possibility of states and as (b) a direct evidential marker, where the alternative possibility disappears. This paper concludes the characteristics of *kamo(shirenai)* as follows.

1. For the epistemic use (*kamo1*), the speaker uses *kamo1* to express that the truth of the proposition p has not yet been committed. Thus, there exist both the possibility of p and the possibility of not p.
2. For the direct evidential use (*kamo2*), the speaker's evaluative judgment based on evidence from his/ her direct experience is the essential condition for its interpretation. This evaluative judgment causes the possibility of not p to disappear.
3. The evaluative judgment must involve (i) description of the current state, and (ii) scalar predicates.
4. Since *kamo2* is attached to a proposition p involving evaluative judgment, which entails the truth of p, *kamo2* does not express a possibility but serves as a hedge.

(受領日 2008年6月20日)
(受理日 2008年10月8日)